

割烹着な人びと

めぐる冒険 19
わっぱりを



加藤ジャンプ

があつて、ならば割烹着が暗喩するものは一体なんなのか考えてきたのである。居酒屋とかメイドカフェとか、ちらほら見られる割烹着スタイルが表象するのは一体なんなのか、やっぱりよくわからないのである。あまつさえ、割烹着の売れ行きはちよつと上向いているという。どういふわけなのだろうか。

前回、「派出夫」について書いた。家事を請け負う派出婦が先に登場し、戦後になって同じ仕事をする男性が現れ「派出婦」ではなく「派出夫」として活動した。高度経済成長期まではそうした男性版派遣型家事代行サービスはそこそ流行ったようだが、その後は廃れた。家事一般を「女性の仕事」と見なす男性にとって、男性が家事を請け負うことに抵抗があつたことや、高度経済成長期になり、より身入りのいい仕事が増えたことなどが考えられるが、衰退の理由はいくつかあるのだろう。

で、彼らはちゃんと割烹着を着ていた。実際のニュース映像でも、当時の『サザエさん』も取り上げていた。ドラマと映画にもなった漫画『ますらを派出夫会』でもしつかり割烹着を着込んだ派出夫が活躍して

聖火リレーが福島ではじまった。やるのかやらないのかわからないままで、聖火リレーが始まるのもわけがわからないし、その雰囲気も異様だ。福島では、スポンサーの車が行列をなして大騒ぎしていた。もともと何が「聖」なのか意味不明だけれど、こうなると、もはや聖火というより、俗火である。エレクトロカルというかポリテイカルとかビジネスなパレードのなか、聖火ランナーが居心地悪そうに見えるのは私だけではあるまい。

いろいろわからないことだらけで、さあ、オリンピックだなんて誰が思うのだろうか。悪酔いしそうな光景である。

そして緊急事態宣言が解除されたうえに春休みである。街中に人が多い。とはいっても飲食店には時短営業の要請が続いている。休業している店もかわらず多い。割烹着姿で働く酒場の店員さんに直撃しようにも、どうにも身動きが取りづらい状況が続いている。

割烹着を着ることでコスプレになるのか、ここまでこねくり回してきた。特定のモデルがないのに、割烹着を着ただけで「コスプレ」と思われてしまう現象

いる。

彼ら派出夫は何も家政婦や派出婦のコスプレをしていたわけではなく、労働者として割烹着を着ていた。また、派出婦が制服のように着ていた割烹着だから、同じ仕事をする者としてそのまま流用するのも別に不思議ではない。

だからといって、今、居酒屋で割烹着を着ている女性が「派出婦」や「派出夫」のコスプレをしている、わけではないだろう。ましてや襷掛けもしていないのだから、「国防婦人会」のコスプレなわけもないだろう。実際にそういう酒場で、割烹着が「古き良き」とか、「お母さん」像を表しているようなことを言う人には大勢出会ってきたが、だったら「古き良き」とか「お母さん」の正体は何なのか。

結局、割烹着は何を投影しているのだろうか。

さて、派出夫が出現する少し前まで、割烹着を着こなす職業があつた。女中である。

明治生まれの祖母と昭和一桁生まれの母、それに大正生まれの伯母たちの話のなかに、よく女中が登場した。手ぬぐいをかぶった「やえちゃん」という女中さ

●かとう・じゃんぶ 文筆家。1971年東京生まれ。横浜とジャカルタとジョグジャカルタとクアラ Lumpur で育つ。著書に『コの字酒場はワンダーランド』（六耀社）など。タイトル、本文中のイラストも筆者。